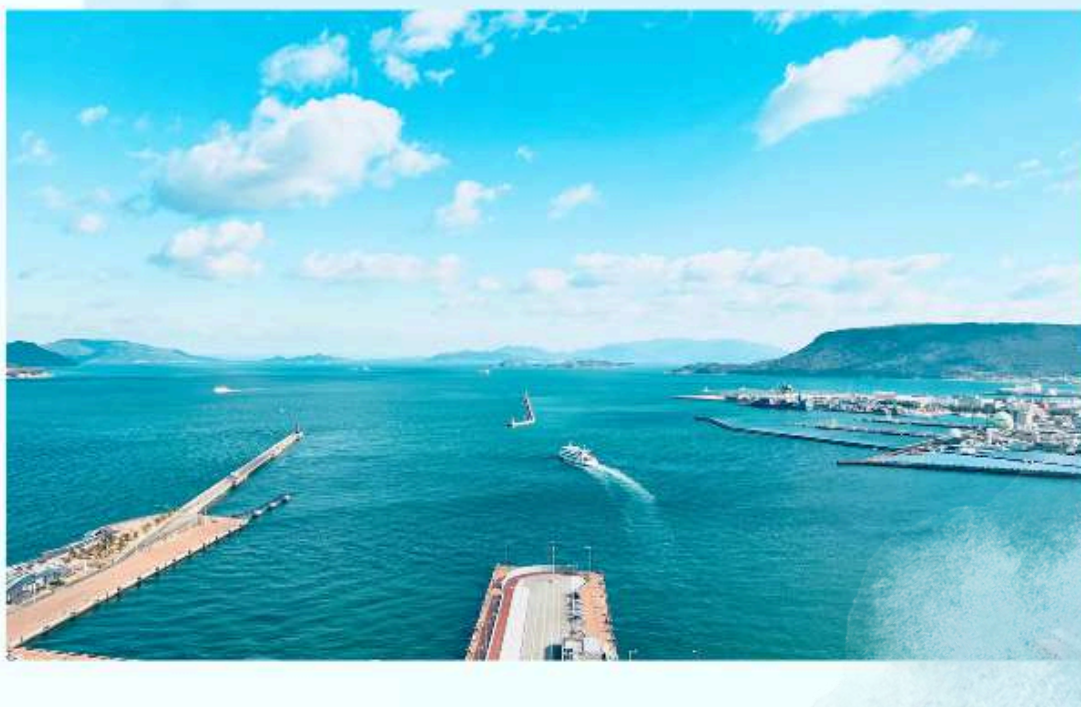


”挑戦”の先に 見えるもの

「“挑戦”の先に見えるもの」は、瀬戸内国際芸術祭に関わる人たちの姿に光をあて、その挑戦の歩みをたどる連載企画です。



なぜ、私たちはこの企画に挑むのか

日本総険はこれまで、法人向けのリスクマネジメント事業に取り組んできました。その本質は、「挑戦する心を止めずに、安心して一步を踏み出せる環境をつくる」ことだと考えています。

私たちが向き合っているのは、リスクそのものではなく、その先にある“挑戦”です。誰かが前に進もうとする姿に、私たち自身も力をもらってきました。

挑戦を応援する会社として、その現場で生まれる物語を社会に届けていきたい——そんな思いから、この企画を始めました。

瀬戸内国際芸術祭の会場でも、アートに関わる人、島で暮らす人、遠くから訪れる人など、それぞれが自分の想いを胸に、“挑戦”しています。私たちは、作品そのものではなく、その背景で動いている“人”の挑戦に目を向け、現場で出会った“挑戦する人”たちの日常や気持ちを、記録し伝えていきます。

シリーズ第8回となる今回は、瀬戸内海に浮かぶ粟島（あわしま）からお届けします。

粟島は、三豊市詫間町の沖合約4kmに位置する小さな島。須田港から船でわずか15分、あっという間に“時間の流れがゆるやかな場所”へとたどり着きます。

粟島は古くから、多くの船員を輩出する「船員の島」として知られており、明治時代には外洋船の船員を育てる日本初の海員養成校「国立粟島海員学校」が開設しました。（現在、校舎は改修工事中）戦後の高度経済成長期には卒業生が資源運搬船の船員として活躍していました。

その名残を今に伝えるように、古い石垣や木造家屋が並ぶ道を歩けば、海とともに生きた人々の記憶が感じられます。

近年は「アートの島」として再び注目を集め、瀬戸内国際芸術祭（以下、芸術祭）の会場として多くの人が訪れるようになりました。穏やかな自然と、島全体に広がるアートの空気。海を眺めながら、ゆっくりと一息つける場所です。



■偶然から始まった、島との縁

今回お話を伺ったのは、アーティストであり、カフェやギャラリーのオーナーとしても活動する、赤井美智子（あかいみちこ）さんと高田雄平（たかだゆうへい）さん。



高田さん（左）と赤井さん（右）。柔らかな空気と笑顔で迎えてくれるお二人。ギャラリーには島の時間がゆっくりと流れています。

芸術祭のパンフレットでも見どころの一つとして紹介されていた、「風待港（Galleryあまた）」を運営されています。お二人は15年以上前にアート展示を通じて出会い、5年ほど前からは京都で共にギャラリーを運営してきました。

そんなお二人に、転機が訪れたのは2022年。赤井さんの知人である男木島のアーティストの方から、「粟島で古民家を引き継いでくれる人を探している」との話が舞い込みます。そしてちょうどその時、高田さんは対岸の三豊エリアで作品展をしており、偶然にも香川に滞在していたタイミング。

その流れのまま翌日に現地を訪れ、初めて粟島の空気を肌で感じたと言います。「見に行ってみようか」——そんな軽い気持ちで、今では大きな転機になったとのこと。

その後古民家を買い取り、2023年の春からアトリエ兼ギャラリーとして再生するプロジェクトが動き出しました。関西方面から定期的に粟島へ出向き、プロジェクトの基盤を整えて行きます。

■アートが“特別ではない”島

粟島で活動を始めてからお二人がまず驚いたのは、島の人たちのアートへの距離の近さでした。

「粟島でプロジェクトを進めようと思ったもう一つの大きな理由は、アートの島ということ。僕らが『アーティストです』と言うと、島民の方から『なにするん？』と笑顔で近づいて来てくれる。通常、アートに対してはハードルがありがちなものですが、粟島はそれがゼロ。アートを『わからないんで』と避けていくおじいちゃんおばあちゃんが、誰一人居ない。アートが受け入れられている島という土壌があったことは大きかったし、本当にやりやすいです。」

芸術祭を通じて、アートが暮らしに溶け込んでいる島として知られる粟島。"アートは特別なものではない"という感覚が自然に根づいています。

島のお年寄りたちはアートへの造詣も深く、意見交換を行えば作品の感想をアーティストさながらに語るそうです。アートを“難しいもの”と捉えず、自然体で受け入れる——その風土こそが、粟島の魅力。

お二人が島を訪れているときは「来てるんやね!」とお声がけてくれ、何かと顔を出してくれるとのこと。

島の空気と人の温かさ、そして“アートを受け入れる土壌”を感じ、「ここならきっとやっていける」と確信を持たったそうです。



島のレンタサイクル受付担当、大口しま子さん。島内には、芸術祭以外のアートも多数見られる。

■人がつないだ縁と、広がっていった輪

物件を見るために島を訪れたとき、案内してくれたのは当時粟島で活動していた地域おこし協力隊の方でした。

「物件の案内だけでなく、一番最初の段階でいろいろな方を紹介してくれた。そのサポートがなければ、誰にお声がけてよいかもわからなかったと思う。」

と高田さんは振り返ります。その“はじめのひとつなぎ”によって、島の人たちとの信頼関係を築く最初の扉が開きます。

やがて建物の再生が始まると、粟島出身の職人さんたちが工事を担当してくれることになります。島の方々と仲の良い職人さんが「こんなことをしてみたいよ」とプロジェクトの詳細を話してくれるなど、協力を得ながら、自然と理解や応援の輪が広がっていったといいます。

そして工事期間中、食事と一緒に取りながら作業を進めて行く時間の中で、島に関わる人たちとの距離がすこく近づいた実感があると話してくれました。

「工事を手伝ってくれた職人さんは今でも仲良しで、気にかけて見に来てくれたり。お孫さんを連れてクレープを食べに来てくれたりして、そういうのがすこく嬉しい。」

と赤井さんは微笑みます。一度の仕事が、長く続く“ご近所のつながり”に変わっていく。その自然な関係性こそが、粟島らしさそのものかもしれません。

■“Galleryあまた”が生まれるまで

古民家を譲り受けてから、最初の1年はひたすら草刈りの日々。実は島に移住を試みる人の中には、この整備の段階で心が折れてしまう人も多いそうです。そんな光景を多く見ていた島の人たちは、お二人の活動も、最初の頃は少し距離を置きながら見守っていたのだとか。

しかしそんな心配もよそに、月に一度は島に通い、黙々と草刈りを続けた赤井さん。もともと自然農法の経験があり、植物と向き合うことに苦痛はなかったそうですが、それでもとんでもない量の草木との格闘があったと教えてくれました。そんな状況の中で1年経っても諦めずに通い続ける二人を見て「よく来るなあ（笑）」、工事が始まれば「ほんまにするんやなあ（笑）」と声をかけてくれた方もいたそうです。

そうしてようやく迎えたりノベーションの本格始動。関西圏から駆けつけた仲間たちが、アトリエや蔵をワークショップ形式で改修し、島に滞在するアーティストたちが壁にイラストを描いていく。一晩だけの滞在でも「どうしても描きたい」と徹夜で筆を取ったアーティストもいたそうです。人の手と想いが重なり合いながら、現在のGalleryあまたが完成しました。

「手間ひまかけた場所だから愛着も湧くし、頻繁に遊びに来てくれたりして、手伝ってくれた人たちも愛着を持ってきている。出来上がって終わりではなく、ここからまた育っていく場所だと思う。それを楽しみにして見てくれていると感じ。皆さん楽しみながらご協力くださるエネルギーが、この家を作っている感じ。私たちのものであって、私たちだけのものではないという感覚です。」

そう話す赤井さんの表情に、感謝の気持ちを感じます。

■未来へ向けて育つ場所

Galleryあまたの建物裏に広がる、広大な庭。お二人や、当時手伝ってくれたワークショップのメンバーやボランティアの方々の奮闘のかいあって、物件購入当時に比べると随分景色も開けたそうです。梅やきんかん、ごまなど季節ごとの実りが育ち、冬には隣のカフェ・あわろはさんの牡蠣を焼いて、庭の果実を絞って味わう。そんな小さな風景が、この場所の日常になっているといいます。

赤井さんたちはその庭を「時を貯める庭」と名付けています。

「時間が貯まって、時間の経過とともに土もどんどん良くなって、その中でいただく恵みがまた庭をつくっていく。アーティストが室内のアート面の改修をしてきている点とかけ合わせて、自然に近い形の循環型の家になっていくと良い。粟島はアートと環境の島なので、島のテーマにも合うかなと思っている。最終的にはこの庭で、音楽やアート展示のイベントをできれば良いなと思っています。次の芸術祭までの目標!」

そう話す姿には、Galleryあまたを、立ち寄る人たちの心の拠り所として発展させていくという未来への希望が力強く感じられました。粟島の静かな風の中で、二人の挑戦はこれからもゆっくりと時を重ねていきます。



アーティストとしての高田さんと赤井さん。訪れるアーティストたちが滞在しやすい空間づくりを通して、新たな創作の輪を育んでいる。

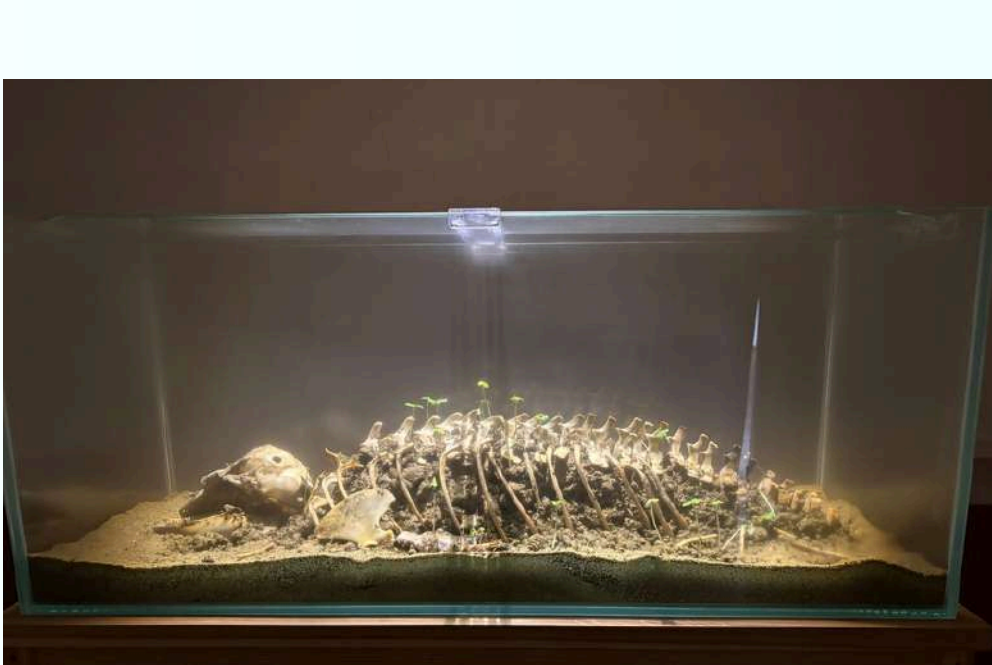
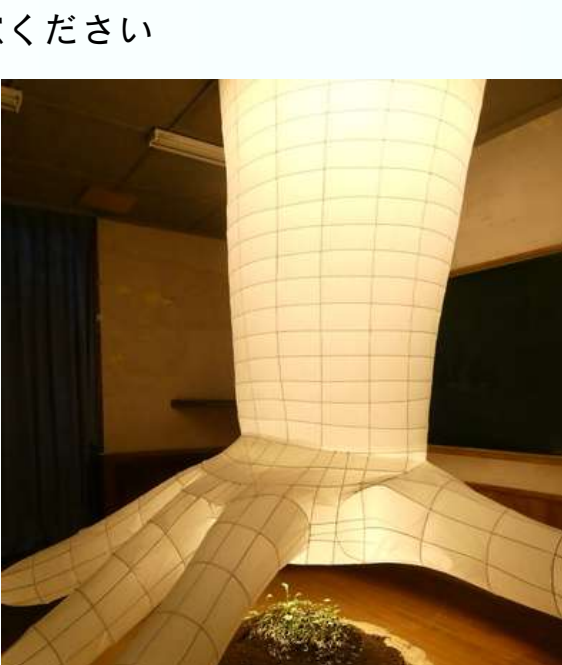
粟島の瀬戸芸作品については「粟島芸術家村」を有する粟島らしい、島の自然や施設を所狭しと活用した”空間を作り出すアート”が目立った。

<作品紹介>

柏木崇吾「粟島の記憶を染める」旧粟島中学校の3つの教室を舞台に、絵画・インスタレーション・彫刻を複合した形で展開された本作は、粟島の風景から切り取った特別な一瞬をもとに、島で採取した土・植物・粘土を素材とした作品。

住民から集めた種子が混ぜ込まれ、会期を通して作品が少しずつ姿を変えていく“生きた風景”を生み出す。粟島エリアにて、瀬戸内国際芸術祭2025の秋会期で展示された。

※画像：瀬戸内国際芸術祭2025出展作品
※本画像の無断転載・二次利用はご遠慮ください



1部屋目：島の植物で染めた絵画を並び、島の木を模した柱には、ワークショップで生まれた”記憶の断片”がなる展示。自然の色と人の記憶が交差する空間。
2部屋目：島に暮らす4歳の女の子の手を型取りして作られた大きな手の平が、島の人々から集められた種を包み込むように展示。人と自然の関わりが静かな気配として満ちる空間。
3部屋目：粟島で見つかったスナメリの骨格を中心に、島の土から芽吹く植物が配置された展示。生と死の循環を、島そのものの素材で示した象徴的な空間。

<作品紹介>

タオリグ・サリナ「航海する記憶の船 — ノードギャラリー in 粟島」モンゴルの遊牧民伝統の移動式住居「ゲル」をモチーフにし、粟島の元船乗りたちの記憶や語りを空間に織り込んだ作品。

ゲルは日本のヒノキなどの素材を使ってアーティスト自らが制作したもので、周囲には、船乗りたちにとって思い出の象徴であるカモメのオブジェを約100羽ほど設置。

アーティスト自身で、粟島に住む元船乗りの方から船で海を巡って世界一周していた頃の思い出話を聞き、その際に録音した音声を蓄音機を通じて展示空間の中に流すなど、視覚と聴覚で船乗りの記憶を感じられる作品となっている。

粟島エリアにて、瀬戸内国際芸術祭2025の秋会期で展示された。

※画像：瀬戸内国際芸術祭2025出展作品／撮影：日本総険
※本画像の無断転載・二次利用はご遠慮ください



展示会場全体に広がる作品。ライティングも相まって、圧巻の光景。



まさに今飛び立つかのような躍動感溢れるカモメ。粟島にあった竹を素材に、アーティストが島民やボランティアの方々と一緒に制作したもの。



丁寧に組まれたゲルの天井部分。2022年から日本各地を巡りながら素材を集め、制作された。